http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.019　12/05/08

方丈記800年

YOMIURI ONLINE の記事から引用。

＊

＜ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず＞。

鎌倉時代の鴨長明の随筆『方丈記』が、書かれてから800年を迎えた。関連書籍の刊行が相次ぐなど、水の流れのように世の無常を説く言葉が改めて今、見直されている。

記念の年に先立ち昨年11月に出た浅見和彦校訂・訳『方丈記』(ちくま学芸文庫)は、4刷9000部を数えた。専門的なイメージの同文庫ながら、じわじわと売れている。「1000円と比較的廉価で、学問的背景を押さえた注や訳が読みやすく、読書人に支持された」と担当者は話す。

岩波書店の隔月誌「文学」3、4月号が「方丈記800年」の特集を組んだほか、福島県在住の作家、玄侑宗久著『無常という力』(新潮社)、小林保治編著『超訳　方丈記を読む』(新人物往来社)も刊行された。

夏目漱石や南方熊楠が英訳を行い、作家の堀田善衛は、1945年3月10日の東京大空襲の後に読みふけり、『方丈記私記』(ちくま文庫)を残すなど後世の文学者の心をとらえてきた『方丈記』は、意外と短く、全文で約8600字、原稿用紙22枚程度だ。

どこに魅力があるのか。京都産業大の小林一彦教授は、「鴨長明にはジャーナリスト的視点がある。まるで新聞社のデスクがカメラを持って現場に出たような、見たことを現在進行形の文体で書く筆力と論評力がある」と話す。

源氏と平家による戦乱と悪政続きの都を生き、無常感を抱いた長明。大火や飢饉など災厄の描写は、炎の形や死臭まで真に迫る。

1185年の元暦の大地震の記述もリアルだ。液状化のごとく＜土裂けて、水湧きいで＞、寺社が壊れ＜さかりなる煙＞のような塵灰が立ち上り、余震が続き、揺れる大地や家の壊れる音は、雷と違わなかったという。

その後の状況の記述と評価には、ハッとさせられる。

＜いささか、(人々の)心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日重なり、年経にし後は、言葉にかけて言ひいづる人だになし＞

油断すれば記憶の衝撃も、話す人がなくなって、うたかたのように風化する。800年前の京の隠者は、震災後の我々に警告を発し、無常をかみしめるよう促している。

＊

『羅生門』にも引用されたこの作品、記事の途中にあるように、原稿用紙わずか22枚の小品であるが、当時の大火、大風、飢饉、地震の様子をリアルに描いていて読み応えがある。特に、対句を用いた和漢混淆文、つまり、日本的文体である和文脈と、漢文訓読的な文体である漢文脈がバランスよくミックスされた文体は、(描かれている内容はともかく…) 音読して気持ちがよい。

先日の竜巻の被害に似た記述もある。昨年の震災も思い起こされる。興味のある人は手に取ってみるとイイだろう。書名は、出家した筆者が、晩年、１丈（3.03メートル）四方の庵を建てて隠棲したことに由来する。